

数え歌に見る「明治二十二年熊本地震」の記憶

大島, 明秀
熊本県立大学

<https://hdl.handle.net/2324/1807624>

出版情報：熊本都市政策. (4), pp.88-95, 2017-03. 熊本市都市政策研究所
バージョン：
権利関係：

数え歌に見る「明治二十二年熊本地震」の記憶

大 島 明 秀

〈数え歌に見る「明治二十二年熊本地震」の記憶〉



(左)
「熊本県飽田郡震災地ノ全図」(大島明秀蔵)
89 ページ参照

(下)
『はつはるのごまんざい』下巻
(米谷隆史氏蔵) 92 ページ参照



数え歌に見る「明治二十二年熊本地震」の記憶

大島 明秀

熊本県立大学文学部日本語日本文学科 准教授・博士（比較社会文化）

キーワード：明治二十二年熊本地震、数え歌、口承

1 はじめに

4月16日未明、マグニチュード7.3、最大震度7に及ぶ「平成28年熊本地震」の「本震」が熊本を襲った。一昨日夜に起こったマグニチュード6.5、最大震度7の大地震（「前震」）の直後に、それを上回る巨大地震が襲い掛かったことは未曾有の事態と言ってよいだろう。

それまで熊本には地震に対する「安全神話」が確かに存在した。個人的な経験から言えば、それは平成7年1月17日の「阪神・淡路大震災」においても同様で、震災以前には阪神地域にも地震が来ないという「神話」が浸透していた。

しかしながら、阪神地域でも、「東日本大震災」（平成23年3月11日）の主な被災地である東北地域でも、百年ないし数千年単位の歴史から俯瞰すれば繰り返し大震災に見舞われていることは疑いの無い事実である。ここで今熊本の過去を繙けば、やはり127年と8か月前の明治22（1889）年7月28日、「明治二十二年熊本地震²」（通称、金峰山地震）に襲われていた。同年4月に市町村制が施行された直後のことで、いわば近代日本が経験した初めての巨大地震であった。

不幸中の幸いと言うべきか、当該地震の状況と行政の対応は近代行政文書に「記録」されており、それらをもとに地震の規模や被災状況を詳細につきとめることは可能であり、後述するように、『新熊本市史』編纂に携わっていた山中進が既に解明してきた。

ただ、山中の成果によって実情が把握できるようになった一方で、死者21名を出した当該地震が、いつの頃からか人々に忘れ去られてきた事実にも留意すべきである。かように「記憶」が失われたことで、「明治二十二年熊本地震」の存在に加え、当該地震に対する同時代あるいは後世の認識もまた歴史の中に忘却されることとなった³。

以上を踏まえて、本稿では行政の「記録」ではなく、民間の「記憶」という視座から「明治二十二年熊本地震」を追究する。具体的には、人々の間で語り継がれた「数え歌」を用いて、同時代あるいは後世に伝承された「物語としての明治二十二年熊本地震」を掘り起し、実相とは異なるもう一つの歴史に迫る。

2 「明治二十二年熊本地震」の概要

先述したように、「明治二十二年熊本地震」は市町村制が施行された直後に起きた、近代第一号の大地震であった。ただし、近年までその存在に関心が向けられることはなく、県政・市政資料や新聞、官報、あるいは本震後の10月に官報を主たる情報源として作成したと見られる『熊本明治震災日記⁴』といった一次および二次史料がありながらも、国立天文台の『理科年表』、もしくは『熊本市政七十年史』や『熊本県史』といった地域史文献で軽く言及されるにとどまり、実情が深く追究されることはなかった。

かかる状況にあつて、地理学者・山中進は平成8（1996）年に発表した論文で、県政・市政の一次史料である「熊本県公文類纂」と「熊本市政資料」を中心に、複数の史料を丹念に付き合わせ、その実情と被災状況を明らかにした。

山中によると、発生時刻は明治22年7月28日午後11時40分頃。この地震で21人（飽田郡が16人、熊本市が5人）が犠牲となった。翌8月5日までの調査で、全倒家屋234、半倒229を数えた。さらに裂地893件、道路崩壊137件、山林崩壊17件、耕地・宅地崩壊3336件、堤防崩壊45件が報告され、加えて、橋梁壊落24件、橋梁破損41件、井戸増水19件、井戸減水1件、井戸濁は138件に上った。震動回数については、9月以降余震が激減したものの、地震発生からその年12月31日までに、「劇震」が2回、「稍強」が70回、「軽震」が228回を数えた。なお、地震が起こる直前、

7月22日から24日にかけて豪雨で80人近い死者を出した直後に起こった災害であったことを付言しておく⁵。

ここで、実情把握をさらに鮮明にするために、「熊本県飽田郡震災地ノ全図⁶」と記された新出の災害絵図を参考資料として提示したい(図1)。

本図がいかなる背景から作成されたかは不明であるが、題名に続いて「明治廿二年七月廿八日ノ夜ヨリ九月一日の夜迄三十余日、未夕日々鳴動震動止ス」とあることから明らかのように、本資料が「明治二十二年熊本地震」の被害状況を示した墨書の手写図であることに疑いの余地はない。

飽田郡を中央に、上方を南、下方を北に描き、さらに被害の分布状況を認識できるように、裂地を朱書傍線、倒家を朱書三角、崩壊を朱書白丸で示している。これによって「明治二十二年熊本地震」の被害が、金峰山を中心にしてその北、東、南側に集中していることが視覚的に分かる。



図1 「熊本県飽田郡震災地ノ全図」(架蔵)

※カラー版は、82 ページ参照

3 数え歌に見る「明治二十二年熊本地震」の記憶

3.1 伝承される災害情報—地震の記憶装置—

安政2年10月2日(1855年11月11日)、水戸学者・藤田東湖が圧死したことで周知される、いわゆる「安政江戸地震」が起こった。江戸付近では震度6弱以上、死者1万人とも推定される巨大地震であった。その災害情報は、伝聞・風説に加え、摺物である「瓦版」(とその販売人「読売」)や「鯨絵」を通じて瞬く間に広がった⁷。

「報道」的色彩が強い前者においては、主に現場の様相や被害の規模などの最新情報が掲載され、それが民衆に伝わった。一方、国の下に鎮座する鯨が大地を揺らして地震を起こすことを意匠として成立している「鯨絵⁸」は、実は災害の実情を伝えるものではなかったことに留意したい(図2)。

歴史学者・倉地克直によれば、その構図の多くは次の3

点にまとめられる。一つ目に、地震を起こした鯨を懲らしめるもの。二つ目に、富裕者や地震後の普請で潤った職人への批判。三つ目に、「世直り」への期待を示すもの。つまり、地震や地震後の現実に対する不安や不満、やり場のない怒りを、民衆が「洒落のめし」て乗り越えようとした一つの形が鯨絵であった⁹。

ところで、鯨絵の中には歌を組み合わせで成立しているものがある。例えば、一方の鯨が三味線を爪弾き、他方の鯨が鞠をついている『地震鞠うた』(国会図書館蔵)は、絵の上部に十番まで七・五・五調二連の歌を掲載している。題名に「鞠うた」とはあるが、これは鯨絵の一種と見るべきで、そのことは十番の「十ツとやとうとせかいも入おふてゆづふよく かがねの御世でまはりよくくらせませす¹⁰」によく示されている。ここで言う「世界」とは遊里(吉原)のことで、「ゆづふよく」は融通良く。つまり、『地震鞠うた』は潤っている遊郭への批判を主題として成立しており、先に挙げた鯨絵の二つ目の構図に属するものである¹¹。

また、物名歌五首が掲載されている鯨絵『地震用心の歌』(国会図書館蔵)は、それぞれの和歌に十個の物の名を詠み込む技巧を凝らした作品であるが、歌の一つ「木の名十」は「つきひすきやむかやと気を もみきりぬまつももどか

し 地震なき日を¹²」(月日過ぎやむかやと氣を揉みきりぬ待つもどかし地震なき日)とあり、そこには地震が収束する日が来るのを切に願う民衆の感情が表れている。

ここで時代は戻るが、文政11年11月12日(1828年12月18日)に現在の新潟県三条市付近で起こった、「三条地震」(震度7相当と推定)に話題を転じたい。この地域では、瞽女が市井の情話などを長編の歌物語にした「口説きぶし」の演者として活動していたが、「三条地震」を契機としていわゆる「地震口説き」を実演するようになった。その語りは『瞽女口説地震の身上』や『越後地震口説』に窺えるが、聴衆が被災者であれ非被災者であれ、聴き手に迫体験を迫るように瞽女は三味線に乗せて「三条地震」の惨状を歌った。そしてそれは被災地にとどまらず、江戸でも行われた¹³。瞽女の声、もしくは摺物の読書や暗唱などを通して、遠く離れた地で震災を経験していない人々もまた、その「物語」を通して地震を迫体験した。

歌は古来より感情表出や記憶のための装置として用いられてきたが、鯨絵に掲載された和歌や、音曲に乗せた瞽女の声、あるいは摺物を通して暗唱された歌が、当時の惨状、現場の状況や民衆の感情を伝承するとともに、その「物語」が、それを読み、聴き、感じ、想像した当事者／非当事者の地震認識や記憶に少なからぬ影響を与えたことは想像に難くない。



図2 文化8(1811)年校正再版『増補大ざつしよ』(架蔵)より。
 国土を取り囲んでいるのは明らかに龍であるが、「地底鯨」と呼ばれている

3.2 「明治二十二年熊本地震」と数え歌

3.2.1 「熊本地震数え歌」の書誌

それでは、歌によって「明治二十二年熊本地震」は伝承されたのだろうか。以下、かかる問いに応答するべく、七・五調三連の歌二十番から成る新出の歌物資料を紹介したい。なお、題名は「熊本地震」と記されているが、本稿では便宜上資料名を「熊本地震数え歌」と呼ぶ。

墨書で手写された本資料は、縦24.7種、横33.6種の楮紙を中央に折り目が付けられ、そこを境に上下逆さまに歌を約十番ずつ、計二十番が記載されている。折紙で用いると資料は横長状になり、こうすることで、読者が九番までを読み終えると、裏返すとそのままの方向で続けて十番に

進むことができる(図3)。

それでは「熊本地震数え歌」を確認していこう。なお、翻刻にあたっては、題名と歌番を太字に改め、丸括弧で通釈を示した。

熊本地震

- 一 ひとつしはん ひこのくに (一)新板肥後の国
 くまもとじやうがの 大ぢしん (熊本城下の大地震)
 きくもかたるも あわれさに (聞くも語るも憐れさに)
- 二 ふしきなるかな 大ぢしん (不思議なるかな大地震)
 七月二十と 八にちの (七月二十と八日の)

- そのやちごくハ 十一じ (その夜時刻/地獄は十一時)
- 三 みてもきいても おそろしや (見ても聞いても恐ろしや)
- やまはくつれる ちかわれる (山は崩れる地が割れる)
- みずいでく けむがでる¹⁴ (水出てくる煙が出る)
- 四 よるのぢしんで しんのやみ (夜の地震で真の闇)
- おやこのたてわけ さらになし (親子の立て分けさらになし)
- こともかなくやら さげぶやら (子どもが泣くやら叫ぶやら)
- 五 いちばんあわれハ ひこのくに (一番憐れは肥後の国)
- くまもとしやうかの ありさまハ (熊本城下の有様は)
- いちどにつふれて みのけたづ (一度に潰れて身の毛立つ)
- 六 むざんなるかや こどもしゆや (無残なるかや子ども衆や)
- てあしのかなわぬ としよりハ (手足の叶わぬ年寄りハ)
- いしやはしらに つぶされで (石や柱に潰されて)
- 七 なんとこれてハ ならなひと (何とこれではならないと)
- とかくいのか ものたねと (兎角命が物種と)
- なぐやらにけるやら おうさわき
- (泣くやら逃げるやら大騒ぎ)
- 八 やまハやふれる ちかわれる (山は破れる地が割れる)
- ひごのくにてハ きんばうさん (肥後の国では金峰山)
- なりたすとひだす しゃハちこく
- (鳴り出す飛び出す娑婆地獄)
- 九 こゝにあわれハ かきりなし (ここに憐れは限りなし)
- むらハ三千 七かむら (村は三千七ヶ村)
- つぶれたやがハ 十二まん (潰れた家数知(は)十二万)
- 十 とゞさんかゝさん おばゝやと (父さん、母さん、お婆やと)
- こともハなくやら すかるやら
- (子どもは泣くやら縋るやら)
- おやこわかれの あわれさよ (親子別れの憐れさよ)
- 十一 いまきうしう おそろしや (今は九州恐ろしや)
- 七十ごかしよの じかわれで (七十五ヶ所の地が割れて)
- けかんにんにんハ かつしれず (怪我人・死人は数知れず)
- 十二 二まん三せん 五百たん (二万三千五百反)
- てんじてんハだ みなつふれ (田地畑皆潰れ)
- ほりか百ぼん 川四ほん (堀が百本・川四本)
- 十三 さんせんせかみの ひとハ (三千世界の人々は)
- あわれにかんして きしやうする (憐れに感じて記誦する)
- まづだいはなしの たねとなる (末代話の種となる)
- 十四 しかだなくなく このさわぎ (仕方なくなくこの騒ぎ)
- みつせめひせめて 大ちしん (水責め火責めで大地震)
- いきたこゝろハ さらになし (生きた心はさらになし)
- 十五 このときひせんの なかさきも (この時肥前の長崎も)

- ひこのくまもと みやさきも (肥後の熊本・宮崎も)
- ちくぜんちくごの たいさわき (筑前・筑後の大騒ぎ)
- 十六 ろくにふせんや ふんこから (陸に豊前や豊後から)
- ひうがおうすみ さつまゝて (日向・大隅・薩摩まで)
- 百りよへんの 大じしん (百里余辺の大地震)
- 十七 七十二がしよの とうじバわ (七十二ヶ所の湯治場は)
- いちどになりたす おうさわき (一度に鳴り出す大騒ぎ)
- にけたすとひたす ころびたす
- (逃げ出す飛び出す転び出す)
- 十八 八まん三せん 五百いん (八万三千五百人)
- けかんにんにんの おてあてに (怪我人・死人の御手当に)
- おかみのおなさけ ありかたや (お上のお情けありがたや)
- 十九 くまもとしやうかて 名も高き (熊本城下で名も高き)
- おやにかうハの きろくさん (親に孝行のキロクさん)
- かなかめさつかる このふしき (金甕授かるこの不思議)
- 二十 にわかたきろくの にわさきが (庭方キロクの庭先が)
- われてふきたす かなかめハ (割れて噴き出す金甕は)
- おうばんこばんて 十五まん (大判・小判で十五万)

一番に「しんはん」(新板)とあるのは、底本が摺物であることを示唆しており、加えて、二番の「ふたつ ふしきなるかな」や三番の「みつつ みてもきいても」に明らかのように、歌番の数字に合わせて歌詞が始まることから、本資料が「数え歌」であることは一目瞭然である。

また、幕末から明治中期あたりまで、各地で人情や世情を題材とした「歌物」が簡素な摺りで出版されていたが、これらは二十番から成り、十番まで掲載した横長の摺物二葉が刊行される出版形式が一つの典型であったようである¹⁵。なお、先述したように「熊本地震数え歌」は、中央で折紙状にすると約十番が横長二面になることから、同時代における「歌物」の形態を意識しながらかように作成されたものと見てよいだろう。

ついで表記に着目すると、四番では標準語では「さげぶやら」(叫ぶやら)とあるべき歌詞が「さげぶやら¹⁶」、五番でも「いちばん」(一番)が「いちばん」、「いちどに」(一度に)が「いちどに」とあるように、言葉づかみに東北方言が反映されていることが分かる。

その背景として、東北方言が反映された近世版本(往来物)の存在や¹⁷、明治20年代における越後地方の「口説きぶし」、その他当地の方言が反映されている長野や岩手の摺



図3 「熊本大地震歌」(架蔵)



図4 『はつはるのごまんざい』下巻 (米谷隆史氏蔵)。明治25年に新潟県で出版された摺物。
「えび」(海老)とあるべきところが「いび」となっている。 ※カラー版は、82ページ参照

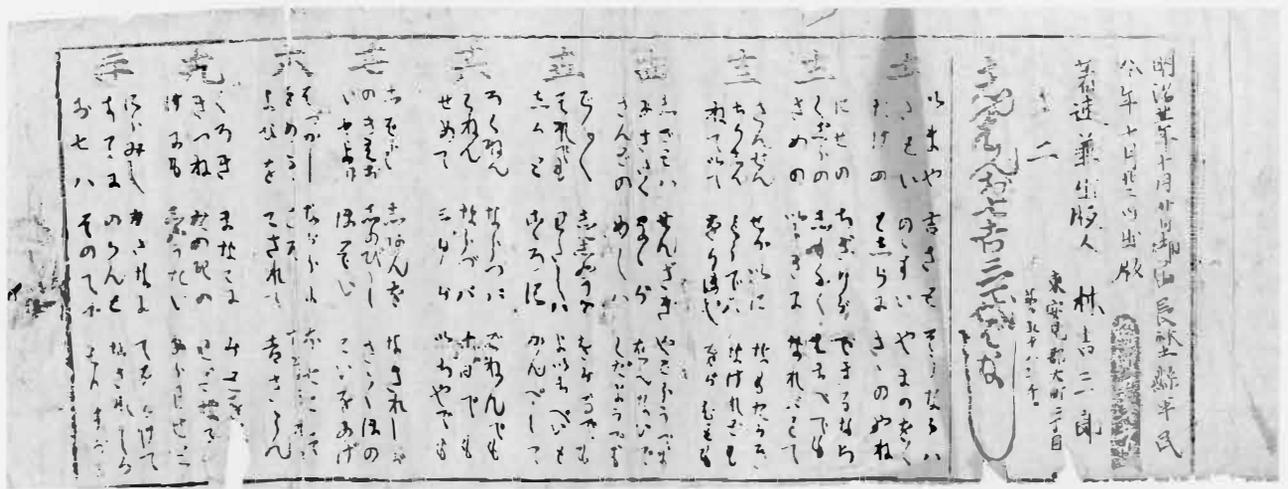


図5 『しんはんお七吉三代ばなし』の二葉目（架蔵）。明治21年長野で出版された摺物。横長の料紙に三・四・五調三連の歌十一番から二十番までが摺られている。十三番で「せかいに」（世界）とあるべきところが「せがいに」となっている

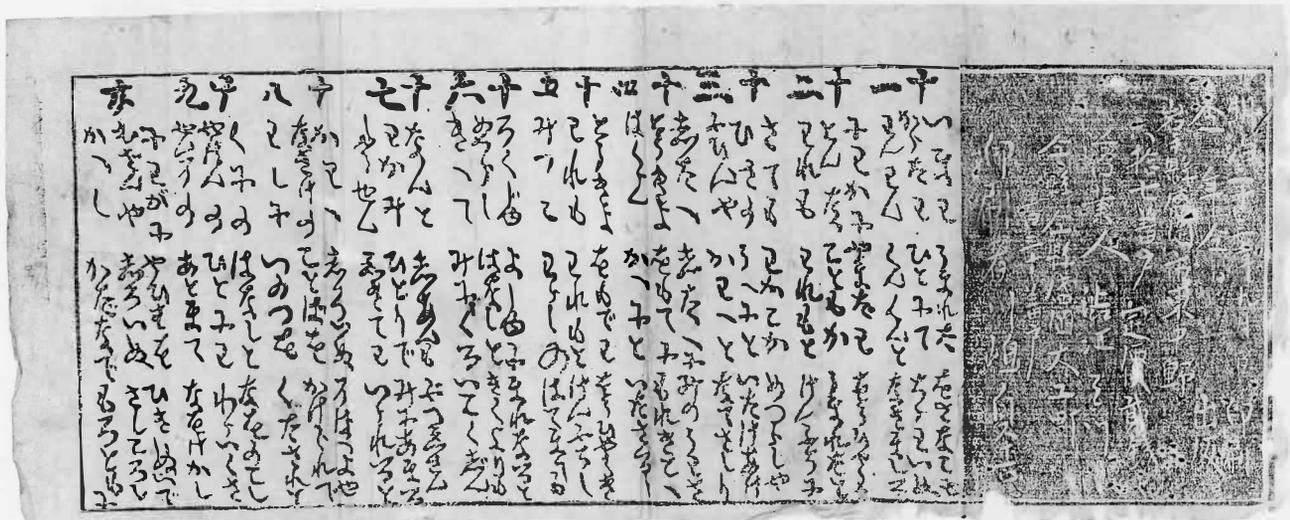


図6 明治23年盛岡で出版された摺物の二葉目。三・四・五調三連の歌十一番から二十番までが摺られている。廿番で「にわかに」（俄かに）、「ひきぬいて」（引き抜いて）、「かたな」（刀）とあるべきところが、それぞれ「にわかに」、「ひきぬいで」、「かだな」となっている

物に確認されている事例などを勘案すると、そもそも東北方言で記された摺物を底本にして「熊本大地震数え歌」が成立したものと考えることもできる（図4～6）。

しかしその一方で、本写本を作成した際に音読しやすいよう手写者が底本の表記を方言に改めたものと推測することもでき、さらには、そもそも底本自体が存在せず、出版を意図しつつ方言で作成した手写者自作の「数え歌」である可能性や、巷間に広がっていた「数え歌」を手写者が耳にして書き起こした資料であるとする可能性も否定できない。ただいずれにせよ、「熊本大地震数え歌」が熊本から遠

く離れた東北地方を中心に受容されたことに間違いはないだろう。

3.2.2 「熊本大地震数え歌」の内容と位置づけ

「熊本大地震数え歌」の内容に関して言えば、地震の発生時刻、現場の様相、災害の規模や範囲、被害状況、そして人々が感じた恐怖や混乱の様子など、一番から十八番までは「災害情報」や「惨状」が詳細に語られている。ただし、九番の「つふれだやかみ 十二まん」（潰れた家数十二万）や、十八番の「八まん三せん 五百いん」（八万三千五

百人)の「けかにんしにん」(怪我人・死人)、あるいは十五番と十六番で、九州中が揺れる「百りよへの 大じしん」(百里余辺の大地震)と唱えているように、被災状況を大きく誇張していることには注意を要する。ただし、十一番だけは「七十ごかしよの じかわれで」(七十五ヶ所の地が割れて)のように、実際より少ない裂地が語られている。

ところが、最後十九番と二十番ではそれまでとは打って変わり、孝行者のキロク(喜六か)という人物が地割れした庭から大判・小判が入った金甕を授かり、取って付けたようにめでたく幕を閉じるが、その結末の迎え方は典型的な昔話のそれである。以上から、「熊本地震数え歌」は近世の物語的な要素を含みながら、実相から変容した「物語としての明治二十二年熊本地震」情報を伝えた資料と言える。

さて、管見の限り近世の地震に係る「数え歌」は認められなかったが、「明治二十二年熊本地震」以降の地震に関しては事例が確認できる。例えば、観測史上最大の内陸地震と称される明治24(1891)年10月28日に起こった「濃尾地震」でも作成された。ただし冊子形態ではなく、口頭で現在まで伝えられた。その「数え歌」は七・五調三連の歌十番から成り、歌詞は地震の「惨状」と救助の様子を描いている¹⁸。

また、物理学者・田中銚愛橋^{たなかだてあいきつ}が所蔵していた七・五調三連の歌十番から成る「数え歌」にも触れておこう。本資料に着目した菅原考平は、観測史上最大の内陸地震と称される「濃尾地震」(1891)から「明治三陸地震津波」(1896)の間に作成されたものと推定している。歌詞は教訓的な内容で、地震に対する警戒と対策を説きながら、科学で地震を防げることを諭すものとなっている¹⁹。

さらに、大正12(1923)年9月1日に発生した関東大震災でも「数え歌」は作成された。東京と並んで神奈川は最も深刻な被害に遭った地域であるが、同県の足柄上郡開成町金井島の古民家から冊子形態となった手写資料「大地震のかぞえぶし」が発見された。本資料は「熊本地震数え歌」と同じく七・五調三連の歌二十番から構成されているが、先に挙げた「濃尾地震」の「数え歌」と同様に、地震の「惨状」や被災した人々の「恐怖」を描出しており、最後は救助に対する感謝で結ばれている²⁰。

ともあれ、活字メディアが発達した「明治二十二年熊本地震」以降も「数え歌」を通して地震の記憶は伝承されたが、ただし「濃尾地震」以後は近世的な物語や洒落、風刺

といった要素はなく、ひたすら「惨状」やそれに対する「恐怖」や「警戒」を歌った内容となった。

4 おわりに

近世後期および幕末に、世情風刺を主な題材とした「数え歌」は、武士から庶民、女性や子どもに至るまで広く親しまれたが、明治になっても「数え歌」は教化・教育目的で大いに利用され、それは明治20(1887)年に文部省が編纂した『幼稚園唱歌集』や同43年の『尋常小学読本唱歌』、さらには同45年の『尋常小学唱歌 第三学年用』にも採用されるほどであった²¹。

ただ、資料的な制約からか、管見の限り近世の地震にまつわる「数え歌」は確認できなかったものの、一方で、近代日本が経験した初めての大地震である「明治二十二年熊本地震」に係る「数え歌」については発見することができた。

内容面では、以降に発生した「濃尾地震」や「関東大震災」に係る「数え歌」が、地震の「惨状」とそれに対する「恐怖」や「警戒」に終始するのに対し、「熊本地震数え歌」ではデフォルメされた「災害情報」と「惨状」の語りに加えて、最後はキロクという孝行者が地割れした庭から大判・小判が入った金甕を授かる展開となり、めでたく幕が閉じる。その結末の在り様はまさしく昔話の一類型であり、資料の作成時期が近代への移行期であったことを反映して、近世の物語的な要素を含む内容となっている。

そこでは誇張した「災害情報」や「惨状」、そして人々の「恐怖」が演出され、さらには孝行者の成功譚まで含んだ「物語としての明治二十二年熊本地震」が、震源から遠く離れた東北地方を中心に「数え歌」という記憶装置を通して伝承された。

案ずるに、「熊本地震数え歌」以外の歌や語りによっても当該地震は伝承され、その数だけ「物語」が生まれたはずである。実相から乖離したそれらの「物語」は、各々がもう一つの確かな「明治二十二年熊本地震」の記憶であったが、いつしか歌や語りの人々に忘れ去られるとともに、この地震もまた歴史の中に埋没することとなった。

¹ 気象庁による正式名称。なお、「震災」は、大規模火災や津波など二次的な被害をもたらした際に使用される呼称。

² 当該地震の正式な名称は確定されていないが、前記の「平成28年熊本地震」に倣って、かかる呼称とした。

³ 例えば、近年刊行された『日本歴史災害事典』（北原糸子、松浦律子、木村玲欧編、吉川弘文館、2012年）においては、当該地震は立項されていない。なお、年表には地震名と犠牲者数が掲載されているが、死者20人とされており、山中論文が踏まえられていない。

⁴ 水島貴之『熊本明治震災日記』（活版舎、1889年）。

⁵ 以上、山中進「明治二十二年熊本地震の記録」（『市史研究くまもと』第7号、1996年）を参照した。

⁶ 「熊本県飽田郡震災地ノ全図」一枚、27.1×19.2 匁。墨書手写図。架蔵。なお、題名、引用文の旧字・異体字は現在通用する字体に改めた。以下同。

⁷ 安政江戸地震に先立つ弘化4年3月24日（1847年5月8日）に起こった震度7相当と推定される「善光寺地震」でも、伝聞・風説に加え、「瓦版」（「読売」）、鯨絵、災害絵図といった摺物による災害情報の広がり報告されている。『1847 善光寺地震報告書』（「災害教訓の継承に関する専門調査会報告書」、内閣府中央防災会議、2007年）、168～175頁。

⁸ 中華思想に基づく発想から、しばしば中世の日本図には龍が国を取り囲んでいるものがある。地震はこの龍が国土を揺らすことで起こるものと考えられてきたが、いつの頃からか鯨に変わった。なお、伏見城建設中の文禄元（1592）年12月、名護屋陣中から京都所司代・前田玄以に宛てた豊臣秀吉書状中に「ふしみのふしん、なまつ大事にて候」（伏見の普請、鯨大事にて候）とあるのが、目下のところ鯨を地震と結びつけた初出である。桑田忠親『太閤書信』（東洋書院、1991年復刻版〔初版は地人書館、1943年〕）、226～229頁。倉地克直『江戸の災害史 徳川日本の経験に学ぶ』（中央公論社、2016年）、23～24頁。

⁹ 前掲倉地克直『江戸の災害史 徳川日本の経験に学ぶ』、221～224頁。

¹⁰ 改行は底本を反映させた。以下、全ての引用文で同。

¹¹ 北原糸子は、原文の草書「せかい」を「貫い」と読み誤っている。『地震の社会史 安政大地震と民衆』（講談社学術文庫版、2000年〔初版は三一書房、1983年〕）、236～237頁。

¹² 「つき」、「檜」、「杉」、「かや」、「もみ」、「桐」、「松」、「桃」、「かし」、「なぎ」の十木が詠み込まれている。

¹³ 先述した善光寺地震でも、これに係る「地震口説き」の摺物が確認されており、その中には信州版のみならず、江戸版も確認される。前掲『1847 善光寺地震報告書』、180頁。榊澤龍吉『叙事民謡 善光寺大地震』（銀河書房、1976年）。

¹⁴ 底本では「たつ」を見せケチにして「でる」に変更している。

¹⁵ 板垣俊一「新潟県に於ける明治に唄本（一）—書誌関係を中心に—」（『新潟の生活文化』第4号、1997年）、26頁。なお、米谷隆史氏からは、当該論文の存在や、方言が反映された出版物について様々な御教示をいただいた。記して謝する。

¹⁶ 傍線は筆者による。以下全ての引用文で同。

¹⁷ 米谷隆史「往来物に見る方言反映事例について—近世後期の東北地方における—」（『熊本県立大学文学部紀要』第20巻73号、2014年）。

¹⁸ 「歴史地震記録に学ぶ 防災・減災サイト」

（<http://www.pref.aichi.jp/bousai/densho/gensai/02/>、2016年9月19日11時30分取得）。

¹⁹ 菅原孝平「物理学者田中館愛橘の『地震数え唄』と地震学黎明期の素描」（『岩手の地学』第43号、2013年）。

²⁰ 「タウンニュース（足柄版）」2015年1月17日号

（<http://www.townnews.co.jp/0608/2015/01/17/267835.html>、2016年8月1日7時30分取得）。資料名は表紙を正確に解読したものを用了。

²¹ 中村紀久二「数え歌に見る庶民のレジスタンス—文部省「幼稚園唱歌集」までの前史—」（『月刊社会教育』第13巻1号、1969年）。

安田寛「数え歌～庶民と士族、それぞれの旋律～」（『歴史と旅』第28巻11号、2001年）。山崎浩隆、中川（森）みゆき「明治期の唱歌における数え歌」（『熊本大学教育学部紀要』人文科学、第60号、2011年）。